

子どもが領域固有の運動の面白さを追究していく

体育授業づくり

～ベースボール型の反省的実践により～

教育実践高度化専攻 教科指導重点コース 造形・創造科学系（保健体育）

内田 龍

本研究では、子どもの関心ではなく教師の関心で授業が進んでいる現状を問題とした。そこで、子どもたちが領域固有の運動の面白さを追究していく学びの様相をビジュアル単元履歴を活用して明らかにすることを目的とした。

本実践では、ゲーム中心の学習過程によるベースボール型（ハンカチ落としゲーム）の授業を小学校4年生7時間、6年生6時間行った。子どもの学びの様相を、ビジュアル単元履歴と振り返りから分析を行った。そこから、以下の結果を確認した。

子どもの学びの様相は分からぬことを分かろうとする「探りの時間」を経験することでチームとして作戦を考えてから試合を実施し、合言葉「シェイク作戦・夏の大三角形など」による表象の共有化と実践での事象の共有化「相手がこうしてきたからこうしよう・あっち行ってこっち行って・チームとしてこうしていきたい・自分の役割はセーフエリアで待機すること」という戦術的な気付きが生まれた。

子どもの学びの様相と会話を重ねルール変更やゲーム修正を行う「教材化を教材にすること」で教師と子どもの学びのズレに気がつくことができた。